東京教区時報

第１０７９号
2008年５月１１日発行
日本聖公会東京教区
港区芝公園3-6-18
編集人　伊藤裕元

WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.htm E-MAIL:comm.tko@nskk.org
Phone:03-3433-0987, Fax:03-3433-8678 Diocese Office

ペンテコステ メッセージ

聖霊の息吹を求めて

首座主教
ナタナエル
植松　誠

私には83歳の母が関西にいます。その母に、「どこか外国で行ってみたいところがあるか」と聞きますと、英国に行ってみたいとのこと。「英国のどこに行きたいの？」という私の問いに、母は、「昔、日本に来た宣教師たちが生まれ育った町や村に行って、そこを歩き、そこを吹く風にあたってみたい」と。母は幼い頃、海外からの宣教師たち、特にＣＭＳの婦人宣教師たちの働きを見て、大きな影響を受けました。九州でハンセン病者のために献身的に働いたリデル女史やライト女史にも感化され、自分は将来ハンセン病者のために働きたいと思って医師になったことも私は母から聞いていました。何がこれらの宣教師たちに、英国から遠く離れた日本に行って宣教するという思いを抱かせたのか、その原点ともいえる彼らの故郷を訪ね、彼らの墓前にぬかずき、彼らに働きかけた聖霊の息吹を自分も感じてみたいというのが母の願いだったのだと思います。

昨年２月、首座主教会議でアフリカのタンザニアに行きましたが、日曜日は船で１時

《掲載記事の転用可（事前連絡要）》

かべるのが仲々むずかしいです。簡単に言ってしまえば、父なる神・子なる神の力の現れを、「聖霊」と呼んでいると思います。その力の現われが私たち人間の間に体験されないと、父である神さまも、子である神さまとしてのイエス・キリストも、私たちは認識することができないでしょう。

神さまの力の現れである「聖霊」は、昔も今も、世界の中でも、教会をとおしても、人々の交わりの中でも、個人の生の歩みの中でも、様々な形で働いているでしょう。そういう人間の体験を、あのルカは、イエスに従った者たちは、初めて聖霊として認識したという風に描き出してくれました。一同が集まっていた時、エルサレムのある場所で、一同に現れたある力として、描き出しました。ルカは、聖霊は、この時だけ働いたと言っているわけではありません。神さまの力は、こんな風に驚くべき形で現れますヨ、ということを伝えようとしています。

ルカが神さまの力の現れを、人間のことばの壁を乗り越える力として描いているのは、実に意味深いことだと思います。私たちは、たとえば同じ日本語をしゃべっていても、私の暮らす世界と、あの人の暮らす世界が全く違うので、ことばや思いが全く通じないという体験を良くします。世代間のコミュニケーションが難しいのも、いわば違うことばを用いているからです。

人間のことばの違いは、文化の違い、思考法の違い、宗教の違い、主義主張の違い、またライフスタイルの違いによっても生み出され、そこに「壁」が存在することになってしまいます。

聖霊降臨の日に起った出来事として、そのことばに起因する、あらゆる壁が乗り越えられることになった、というのは、神さまの力があってこそ、人が理解し合える道が備えられる、ということを指し示しているでしょう。

（東京教区主教）

【ペンテコステ特集】

間半ほど沖合いのザンジバル島の大聖堂で聖餐式を守りました。その島は昔は奴隷交易の拠点でした。アフリカの奥地で捕らえられた奴隷たちが、積み出し港のダルエスサラームまで長い道を鎖や縄で繋がれて歩かされ、そこからは船にぎゅうぎゅうに押し込まれてザンジバル島まで運ばれました。島では地下の狭い牢屋に入れられ、奴隷市の日には、親子、夫婦、兄弟が無理やりに引き離されて売られていきました。111年前、英国からの宣教師たちの長年にわたる努力の結果、奴隷交易は終わり、現在の大聖堂はその奴隷を繋いでおいた地下牢の上に建てられています。

大聖堂の敷地の隅に墓地があり、たくさんの墓がそこにありました。墓石や墓標を見ると、その多くは宣教師たちのものでした。「ミス・〇〇〇〇、マラリヤで死亡」、「黄熱病で死亡」、「迫害され殉教」などという宣教師たちの中には20代、30代の若さで死んでいった宣教師たちもいます。

これらの墓の前に立ちながら、私は、日本という世界の果て、それも辺境で極寒の北海道に来た多くのCMS宣教師たちのことを考えていました。彼らには年老いた親や家、財産、約束された将来が、そしてそれらに対する責任もあったはずです。「どうして、そんな世界の果てに行くのか。そこで死んでしまって帰れないぞ」と言う声も聞いたはずです。しかし、それでも彼らは未知の任地に赴いていきました。普通の人の価値観からは到底理解しがたい「キリストの十字架の救い」を信じ、全てを捨てて、聖霊の導きと神の祝福を信じて出ていったのでした。

その結果として、ザンジバル島の大聖堂に集う多くの人々があり、また北海道教区の教会や聖職・信徒がいるのだということに私は畏れの思いを禁じ得ません。

彼らに働きかけた聖霊の息吹を、私も今感じ取りたいと切に願い、祈り続けています。

（北海道教区主教）

一同は聖霊に満たされ…

主教
ペテロ
植田　仁太郎

教会は一年をひとつの単位として、神さまがイエス・キリストをとおして語り、行われたことを、毎年毎年心に留める工夫をしました。一番良く知られているのは、クリスマス、イエス・キリストの誕生日とされる日でしょう。教会にとって最も大切な日、イエス・キリストが復活されたことを記念する日、イースターは、毎年移動しますので、ちょっと分かりにくいですが、憶えるべき出来事のトップです。

このイースターと、クリスマスを軸に、さらに、使徒や聖人と呼ばれる人々の教えや働きも、同じように憶えられるように組み込んで作られた一年のサイクルを「教会暦」といいます。特別な「日」ばかりでなく、ある期間は特に〇〇を憶えましょう、という風にシーズンも定められました。

この定め方は、主として、新約聖書の中のルカが記したとされる文書（ルカ福音書と使徒言行録）の流れに沿っています。ルカは、イエスの教えやなさった業を記す時、あるいは初期の教会のあちこちで起った出来事を記す時、（本当はいつ・どこでということが分らなくなっていても）、ちょうどそれを舞台の中で再現するように、ある時、ある場所で、こうして語られた、こうして起った、とひとつの物語として書き記すのが得意な人でした。ちょうど現代のシナリオ・ライターがある歴史の事件を、様々な人物を登場させながら、生き生きとひとつのドラマとして描き出してくれるのに似ています。

「聖霊降臨日」は、クリスマス、イースターと並んで教会が憶えるべき大切な日ですが、少々分かりにくいかもしれません。「父なる神」、「子なる神」はすぐイメージが浮かびますが、「聖霊なる神」はその姿を思い浮